「私はあなたのために祈った」

マルコによる福音書１４章６６－７２節

森島　牧人　牧師

私たちの心に深く入って来る今日の聖書は、「ペトロが下の中庭にいたとき、大祭司に仕える女中の一人が来て、ペトロが火にあたっているのを目にすると、じっと見つめて言った。『あなたも、あのナザレのイエスと一緒にいた。』しかし、ペトロは打ち消して、『あなたが何のことを言っているのか、わたしには分からないし、見当もつかない』と言った。そして、出口の方に出て行くと、鶏が鳴いた。」（１４：６６－６８）と始まっています。人々に紛れて中庭に入り、何食わぬ顔で一緒に火にあたっていたペトロに女中が気づいたのです。このペトロと女中との問答は、最高法院で大祭司と主イエスの間に交わされた問答、「お前は神の子・メシアなのか。」「そうだ。わたしだ。」に比べてあまりにも小さく、黙殺も可能と思われますが、狼狽したペトロは必死になって否定したのです。

狼狽するペトロの姿に見えるものは、単なる彼の人柄などではない、人間の存在の本質とも言える根源的な問題なのです。聖書の中には、ペトロを土台として働くサタンがよく出て来ますが、この時も彼の中に潜んでいたサタンが出て来たということだったのでしょう。慌てて逃げようとする彼を見て女中は人々に言いつけますが、ペトロは再び打ち消したのでした。

聖書は「しばらくして、今度は、居合わせた人々がペトロに言った。『確かに、お前はあの連中の仲間だ。ガリラヤの者だから。』と、すると、ペトロは呪いの言葉さえ口にしながら、『あなたがたの言っているそんな人は知らない』と誓い始めた。」（１４：７０・７１）と続きます。マタイ２６：７３にあるように、我を忘れて女中の言うことを否定しようとする彼の言葉にガリラヤの訛りが出てしまっていたのです。それを指摘されて反論のしようもないペトロは神を引き合いに出し、自分がナザレのイエスの仲間ではないことを誓うことしか出来ませんでした。

ここでの問題は、神の子キリストと自分の関係を三度否んだペトロは、否む度に自分を支える土台や彼自身の信仰告白をも否定することになってしまったのです。つまり、この時大祭司の屋敷の中庭にいたのは、いつも主と共にあったペトロではなく、主イエスと出会う前のガリラヤの漁師ペトロであったのでした。

今日の聖書の出来事が語り継がれていた時代には、ペトロは初代教会の中心人物として使徒たちの先頭に立ち、激しい伝道の日々の中にありました。もしくは、すでに殉教の死を遂げていたかもしれません。つまり、ペトロの伝道によって成り立ったはずの教会が、何と、ペトロの主イエスに対する裏切り行為を語り、それを聖書に記している・・・これは驚くべきことです。12 使徒のトップが三度も主イエスを否定したことを、聖書は語っているのです。

それはおそらく、ペトロ自身が繰り返し告白し語ったということでありましょう。自身のその裏切りを隠すのではなく、それを乗り越え、それを伝道の原動力としている、すなわち、ペトロのその信仰は、この裏切りの上に成り立っているのです。つまり、主と共にあった自身の存在を否むと同時に、一度は打ち消された彼の信仰が主イエスによって再度生かされたという、この事実の上にのみ、彼は存在していたと思われるのです。このように信仰とは、先ず罪人だったという厳しい否定があり、それが主イエスの愛によって生かされて初めて成り立つものなのです。

聖書は「するとすぐ、鶏が再び鳴いた。ペトロは『鶏が二度鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう』とイエスが言われた言葉を思い出していきなり泣き出した。」（１４：７２）と結ばれています。「するとすぐ」という言い方は、この状況の中でも神の御旨が示されているということを現しています。神を引き合いに出して知らないと誓うその時に鳴いた鶏の声は、彼の誓いの言葉をかき消し、否定したのでした。

ですから、主の言葉を思い出して泣くペトロ、わたしはこのペトロの慟哭の背後には、「シモン、シモン、サタンはあなたがたを・・・。しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。・・・ペトロ、言っておくが、あなたは今日、鶏が鳴く前に三度・・・。」（ルカ２２：３１－３４）との御言葉が、彼の心にあるように思うのです。ですから、やがて方言をもって福音を語るようになるペトロ、しかし彼のその方言は、再度主イエスによって支えられ、生かされた新しい方言であったに違いありません。

（説教要約　羽入田悦子）